医療従事者部門（国内）

女性の心と身体をケアする、ワンストップ支援の実現

性被害女性への救急医療

加藤 治子（かとう はるこ）氏

阪南中央病院産婦人科 医師
NPO性暴力救援センター・大阪SACHICO 代表

大阪市立大学医学部卒業後、1975年から阪南中央病院に勤務。医師としての経験を積む中で、性被害女性に対して「もっと丁寧なサポートができないか？産婦人科医師としてすべきことがあるのではないか？」という気持ちを抱き続けていた加藤氏は、同じ思いを持つ仲間たちに呼びかけ、日本初のレイプクライシスワンストップセンターの設立に向け奔走。2010年、性暴力救援センター大阪SACHICOを同病院内に開設した。

“SACHICO”では、24時間体制で女性支援員が常駐しホットラインに対応していることに加え、産婦人科医も24時間体制で対応。また、警察や弁護士などが連携するネットワークを確立し、来所者に応じて必要な対応ができるワンストップ支援を機能させている。現在では、同じようなセンターが全国で少なくとも9カ所立ち上がっており、2013年には全国のセンターをつなぐ全国連絡会も設立され、広がりを見せている。

ボランティア部門（国内）

難病患者の声を日本に響かせるために

小さな声を大きな声へ

伊藤 たてお（いとう）氏

一般社団法人日本難病・疾病団体協議会 代表理事

1945年北海道生まれ。4歳の時に重症筋無力症を発病し、5歳の時には結核を併発するも、1964年札幌南高等学校を卒業、医学の進歩により自身の症状は改善されたが、難病患者同士の情報共有の場として、1972年に全国筋無力症友の会北海道支部を設立。1973年の北海道難病団体連絡協議会設立時に代表・事務局長を務め、1986年には日本患者・家族団体協議会設立、その後、2005年に日本難病・疾病団体協議会（現・一般社団法人日本難病・疾病団体協議会）を設立した。

伊藤氏が筋無力症にとられず、難病というくくりで活動を始めたのは、そもそもその数が少ない難病患者が集まる小さな団体の声も、合わせて大きくすれば、難病政策をより良い方向に導けるのではないかという考えからだった。2008年からは、政府機関の委員を務め、難病患者たちの声を行政に届けることで、難病克服に向けた総合的な対策の確立に奔走している。

医療従事者部門（国内）

加藤 治子（かとう はるこ）氏

阪南中央病院産婦人科 医師
NPO性暴力救援センター・大阪SACHICO 代表

女性の心と身体をケアする、ワンストップ支援の実現

性被害女性への救急医療

大阪市立大学医学部卒業後、1975年から阪南中央病院に勤務。医師としての経験を積む中で、性被害女性に対して「もっと丁寧なサポートができないか？産婦人科医師としてすべきことがあるのではないか？」という気持ちを抱き続けていた加藤氏は、同じ思いを持つ仲間たちに呼びかけ、日本初のレイプクライシスワンストップセンターの設立に向け奔走。2010年、性暴力救援センター大阪SACHICOを同病院内に開設した。

“SACHICO”では、24時間体制で女性支援員が常駐しホットラインに対応していることに加え、産婦人科医も24時間体制で対応。また、警察や弁護士などが連携するネットワークを確立し、来所者に応じて必要な対応ができるワンストップ支援を機能させている。現在では、同じようなセンターが全国で少なくとも9カ所立ち上がっており、2013年には全国のセンターをつなぐ全国連絡会も設立され、広がりを見せている。

教育者部門（国内）

放射線リスクを正しく理解する大切さ

被ばく医療学の継承を

山下 俊一（やました しゅんいち）氏

国立大学法人長崎大学 理事・副学長

1952年長崎県生まれ。1991年より四半世紀近く、チェルノブイリをはじめとする旧ソ連圏における、核に汚染された大地で医療協力、人材育成事業と国際学術共同研究を推進。1995年からカザフスタン・セミパラチンスク核実験場周辺への医療支援も手がけた。こうした活動が評価され、2004年にはWHO（世界保健機関）に出向し放射線プログラムの専門科学官として勤務した。2006年末に帰国。（2011年3月）東日本大震災に伴う原発事故を受け、福島県放射線健康リスク管理アドバイザーに任命された。混乱と混迷の渦中にある福島での活動は長く困難を極めることが予想された地で、チェルノブイリでの経験から山下氏は「誰かが引き受けなければ事態はより深刻になる」と覚悟を決めて放射線に対する正しい知識の啓蒙に奔走。さらに、後継者の育成が急務であると考えた山下氏は福島県立医科大学の副学長に就任し、同大学を国際的な放射線防護の研究センターならびに教育拠点となる事を目指す。

第11回 ヘルシー・ソサエティ賞 受賞者発表

健全な社会は、誰かの努力によってつくられます。

より明るい今日ととよりよい明日に向けて、健全な社会と地域社会、そして国民のクオリティ・オブ・ライフの向上に貢献した方々を称える目的で、公益社団法人日本看護協会とジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人グループによって平成16年に創設されたヘルシー・ソサエティ賞。

今年度も全国から寄せられた推薦候補者の中から、3部門6名の受賞者が決定しました。
いずれも、教育、ボランティア、医療などさまざまな分野で指導的役割を果たしている方々ばかりです。
この賞をきっかけに、国民の健康、地域社会の福祉、さらに生活の質の向上のための有意義な活動が、より広く普及することを私たちは心から願っています。

医療従事者部門（国際）

ベトナムの赤ひげ先生が目指す患者さんを思う医師の姿

患者は家族

服部 匡志（はっとり ただし）氏

アジア失明予防の会 理事

1964年大阪府生まれ。京都府立医科大学卒業後、日本各地の眼科医の経験を重ね、内視鏡を用いた網膜硝子体手術では世界トップクラスになった。2002年から網膜硝子体手術指導医としてベトナム国立眼科病院にて活動を開始。服部氏は自費で医療資機材を購入し持ち込んだだけでなく、貧しい患者さんの手術費を肩代わりすることも多かった。そんなベトナムでの献身的な活動が認められ、2013年には日本国務大臣表彰、第20回読売国際協力賞を、2014年にはベトナム政府より「友好勲章」を授与された。現地では、口ひげを生やした容姿から「ベトナムの赤ひげ先生」と親しまれている。

服部氏の活動の礎は、「患者さんを思いやれる医師になる」という強い気持ちだという。患者さちんのことを一番に考える医療ネットワークをベトナムから世界へ発信すべく、服部氏は「患者は家族」をモットーとして今も前進し続けている。

ボランティア部門（国際）

村人へ歩いて届けるボランティア精神

ネパールのOKバジ

垣見 一雅（かきみ かずまさ）氏

所属団体 無し

早稲田大学を卒業。私立順心女子学園（現・広尾学園）で英語教師として23年間勤務すると同時に、垣見塾を経営。ヒマラヤに憧れネパールを訪れた時に、村人たちの貧困生活を目の当たりにしたことがきっかけで、1993年、54歳の時にネパールに単身移住し支援活動を始めた。

活動開始当初、ネパールの言葉が話せず、村人からの頼みごとにはいつも英語で「OK、何とかしてみるよ」と答えていた垣見氏は、ネパール語で“おじいさん”の意味を持つ「バジ（Baji）」と併せ「OKバジ」と呼ばれるようになった。以来20年以上、村々を歩いて訪ね、そこで出会った人々の声に耳を傾けるボランティア活動を続け、1997年にはネパール国王からゴルカダッチンパワ勲四等勲章を授与。2009年には吉川英治文化賞を受賞し「自分のためではなく他人のために、小さなことでも出来ることを少しずつやる。OKバジの姿勢と活動は、これからも続いていく。

教育者部門（国際）

貧しい人々の声を世界に発信する人材教育に取り組む

研究・政策・実践に架け橋を

神馬 征峰（じんば まさみね）氏

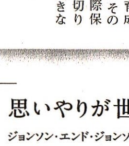
東京大学大学院医学系研究科
国際地域保健学教室 教授

1985年浜松医科大学卒業、在学中、日米学生会議への参加や、恩師伊藤忠邦氏との出会いをきっかけに国際保健を志す。同大学卒業後、飛騨高山赤十字病院研修医、国立公衆衛生院労働衛生学部研究員、ハーバード大学公衆衛生大学院環境保健学部客員研究員を経て、1994年からガボン地区（在ガボン・ヨルダン川西岸地区（在エルサレム）WHO事務所長、1996年からは「ネパール学校・地域保健プロジェクト」のチームリーダーを務めた。その後、武見フェローでハーバード大学公衆衛生大学院人口・国際保健学部で研究者生活を送った後、2002年に東京大学大学院医学系研究科国際地域保健学教室講師となり、2006年から教授を務めている。

「国際保健にとって重要なのは、研究・政策・実践の連携である」と説き、現場と研究の架け橋となるべく後継者の育成に努める神馬氏と、その後継者が日本の国際保健学に新たな道を切り開いていくことに大きな期待がかかる。

思いやりが世界中に広がることを願って

ジョンソン・エンド・ジョンソン 会長 兼 最高経営責任者　アレックス・ゴースキー

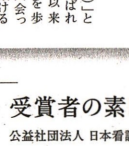


ヘルシー・ソサエティ賞は、人々の生活の向上に貢献した方々を称えることを目的としています。医療は、個人や家族、地域社会、そして世界の国々の最優先課題です。ジョンソン・エンド・ジョンソングループは、“ヘルシー・ソサエティ（健全な社会）”とは、人々にとって、より幸福に、安心できる、豊かな社会であると考えています。2004年に同賞が創設されて以来、ヘルシー・ソサエティ賞と共に、よりよい社会のために尽力する献身的な受賞者の方々を支援させていただくことを大変光栄に思います。

ジョンソン・エンド・ジョンソンにおけるすべての行動規範となる「我が信条」には、第一の責任として、製品およびサービスをご利用いただく医師、看護師、患者、そして母親、父親をはじめとするすべての顧客に対する責任、さらには全社員や株主、地域社会を含め、全世界の共同社会に対する責任があると記されています。当社は、世界中の人々がより長く、健やかに、幸せな生活を送るために貢献したいという思いのもと、ヘルシー・ソサエティ賞を支援しています。この度、第11回ヘルシー・ソサエティ賞を受賞された皆様に、心よりお祝い申し上げます。皆様のご功績が日本をはじめ全世界の人々の生活の向上に繋がることを願っております。

受賞者の素晴らしい理念が社会に浸透していくことに期待

公益社団法人 日本看護協会 会長　坂本すが



第11回ヘルシー・ソサエティ賞を受賞された皆様に心よりお祝い申し上げます。ヘルシー・ソサエティ賞は、信念を胸に地道な活動をされている人々に光を当てることで、社会全体が「よりよい明日に向け健全な社会と地域社会の幸せ」について考え、そして自らの行動につなげるきっかけをつくる、とても意義深い活動です。

今回で11回を数えましたが、大切なことは社会のさまざまな課題としっかり向き合う人々を一人でも多く発掘し、社会に紹介する活動を継続することです。受賞者の皆様の素晴らしい理念が社会に浸透し、若い人々へと伝承していくようこれからも努めたいと思います。

日本看護協会は、国際看護師協会に加盟し、会議や学術集会などで世界の看護師と交流を深めています。そこでヘルシー・ソサエティ賞を紹介すると多くの関心を集めます。人からの思いやりや、やさしさに触れた時に人は幸せを感じるものです。幸せを提供する人々に敬意を表するこの日本発祥の活動が、いずれ世界へと広がっていくことを願います。

第11回審査委員

岩男 壽美子　慶應義塾大学名誉教授、東京都市大学名誉教授
川口 順子　前参議院議員、元外務大臣、元環境大臣
高久 史麿　日本医学会会長、自治医科大学名誉学長
竹内 行夫　前最高裁判事、元外務事務次官
堂本 暁子　男女共同参画と災害・復興ネットワーク代表、前千葉県知事、元参議院議員
日野原 重明　一般財団法人聖路加国際メディカルセンター理事長、聖路加国際病院名誉院長
福田 康夫　元内閣総理大臣、元衆議院議員
横倉 義武　公益社団法人日本医師会会長
（五十音順、敬称略）

第11回諮問委員

安達 知子　総合母子保健センター愛育病院副院長・産婦人科部長、東京女子医科大学客員教授
伊藤 雅治　一般社団法人全国訪問看護事業協会会長
猪口 邦子　参議院議員、元少子化大臣、元軍縮会議大使
宇井 理生　東京大学名誉教授、北海道大学名誉教授、東京都医学総合研究所特別客員研究員
川崎 二郎　衆議院議員、元厚生労働大臣、元運輸大臣
日下 一正　一般財団法人国際経済交流財団会長、元経済産業審議官
玄葉 光一郎　衆議院議員、前外務大臣
斉藤 邦彦　北鎌倉女子学園理事長、ジェスク音楽文化振興会理事長、株式会社パレスホテル顧問
坂口 力　元衆議院議員、元厚生労働大臣
清水 嘉与子　公益財団法人日本訪問看護財団理事長、公益財団法人国際看護交流協会理事長
下村 満子　ジャーナリスト、元『朝日ジャーナル』編集長、株式会社ルネサンス取締役
水田 祥代　九州大学名誉教授、福岡歯科大学常務理事
鈴木 邦彦　公益社団法人日本医師会常任理事
袖井 孝子　一般社団法人シニア社会学会会長、お茶の水女子大学名誉教授
津島 雄二　弁護士、元衆議院議員、元厚生大臣
丹羽 雄哉　衆議院議員、元自由民主党総務会長、元厚生大臣
南野 知恵子　元参議院議員、元法務大臣・内閣府特命担当大臣
畠山 襄　一般財団法人国際貿易投資研究所理事長、元ジェトロ理事長、元通商産業審議官
平林 博　公益財団法人日印協会理事長、公益財団法人日本国際フォーラム副理事長、株式会社三井物産取締役
松谷 有希雄　国立保健医療科学院院長
南 裕子　高知県公立大学法人理事長、高知県立大学学長、高知短期大学学長
森 英恵　ファッションデザイナー
森 樹郎　虎の門病院眼科部長
森岡 茂夫　国際長寿センター連合体名誉顧問
矢崎 義雄　国際医療福祉大学総長、独立行政法人国立病院機構名誉理事長、国立国際医療センター名誉総長
山崎 摩耶　元衆議院議員
渡部 恒三　元衆議院議員、元厚生大臣
（五十音順、敬称略）